

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K02455

研究課題名（和文）植民者二世の記憶と朝鮮表象 旧在朝鮮日本人の戦後と文芸創作の研究

研究課題名（英文）Memories of the Second Generation of Colonizers and Representations of Korea

研究代表者

中根 隆行（Nakane, Takayuki）

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：80403799

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、朝鮮引揚者で戦後に文芸創作を始めた作家を対象に、朝鮮で暮らした記憶とその表象がどのように描かれるのかを検証した。村松武司は、みずからを引揚者ではなく植民者であるとして、祖父の評伝を書く。また、ハンセン病患者の文芸活動をサポートしながら、ハンセン病と朝鮮との関係性を問い続けた。森崎和江も自分は植民者であると公言し、炭鉱で働く女性との交流等を通じて、女性史のオーラル・ヒストリーをまとめあげる。朝鮮を故郷とは呼ぶことができず、自分とは何か、日本とは何かを問い続けた。本研究では、こうした在朝鮮日本人の戦後の文芸創作について、同時代の日本語文学や文学状況を参照しながら、その特徴を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、朝鮮引揚者（「植民者」）による戦後の活動と文芸創作との関連性について、朝鮮表象という観点から詳細に明らかにした点にある。引揚者による朝鮮表象は、個々具体的な特徴をもつものの、敗戦後占領期、1950年代、60年代から70年代と、それぞれの時代の歴史性を加味した特徴も有している。また、社会的意義としては、引揚者が有する植民地での生活史や戦後における各分野での活動が、戦前あるいは戦後の歴史の再検討を促す点にある。以上の点については、外地引揚げ経験をもたない作家との比較による同時代性の考察を含め、戦後の文学史として系譜的に位置づけられると考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, I focused on writers who returned from Korea and began writing after the war, and examined how they depicted their memories of life on Korea and their representations. Takeshi Muramatsu wrote a critical biography of his grandfather, describing himself as a colonizer rather than a repatriate. While supporting the literary activities of leprosy patients, he also continued to question the relationship between leprosy and Korea. Kazue Morisaki is also one of those who has openly declared herself to be a colonizer. She has compiled an oral history of women's history through her interactions with women who worked in coal mines. Amidst all this, unable to call Korea her home, she continued to question who she was and what Japan was. In this study, I revealed the characteristics of postwar literary creations by Japanese people living in Korea, referring to Japanese language literature and the literary situation of the same period.

研究分野：日本近代文学

キーワード：外地引揚者 植民者 朝鮮表象 森崎和江 村松武司 在朝鮮日本人

1. 研究開始当初の背景

本研究は、日本の植民地統治期の朝鮮半島で生活した経験をもつ書き手たちの文芸創作を歴史化し位置づけることを目的とした。特に、文芸創作における朝鮮表象が誰のどのような記憶として形成されたのか、また、文芸創作はいつどこで誰に向かって語られているのかに力点を置き、分析するものである。それぞれの文芸創作に綴られる植民地の記憶とその表象のありようを、書き手の植民地経験や戦後の活動を含めて検証することで、これまで限定的に論じられてきた旧在朝鮮日本人の文芸創作を、確固とした文芸的潮流として位置づけることをめざした。

研究開始当初の背景として、旧在朝鮮日本人の文芸創作は、たとえば後藤明生『挟み撃ち』が高度経済成長期の文学として焦点があてられ、その一面として作家や作中人物の植民地経験が注目されるというかたちで論じられてきた。もちろん植民地経験をテーマにした文芸創作を対象に、戦後における旧在朝鮮日本人の植民地観を論じる論考も、近年徐々に増えてきている。この場合も日本における故郷喪失者の文学として、特に文芸創作に綴られるアイデンティティとその政治性が個別に注視されるという傾向にある。

こうした研究成果の蓄積とともに、成田龍一「「引揚げ」に関する序章」(『思想』2003年)や丸川哲史『冷戦文化論 忘れられた曖昧な戦争の現在性』(2005年)など、おもに外地引揚げ体験を対象に、それらが叙述される戦後の歴史性を問い直すとする歴史学や文化論的な研究がある。旧在朝鮮日本人の文芸創作を対象にしたものとしては、朴裕河『引揚げ文学論序説 新たなポストコロニアルへ』(2016年)や原佑介『禁じられた郷愁 小林勝の戦後文学と朝鮮』(2019年)など、外地引揚げ文学のジャンルの位置づけをめざす研究がなされている。

2. 研究の目的

本研究は、主に1960年代から70年代にかけての旧在朝鮮日本人の文芸創作を対象に、植民地の記憶とその表象のありようを検証した。この時期に活躍した旧在朝鮮日本人は、「植民者二世」にあたる世代であり、敗戦後に思想的な自己形成をなした人物が多い。このような書き手たちの文芸創作は、ジャンルの的にも内容的にもさまざまであるが、文芸創作に描かれる朝鮮表象は、いわば故郷としての植民地の記憶をいったん否認したうえで綴られるという傾向性をもっている。本研究のねらいは、この植民地の記憶と朝鮮表象の関係性に力点を置き、それぞれの文芸創作を系統立てて捉え直すことにある。

日本の高度経済成長期である1960年代から70年代にかけての時代は、朝鮮に限らず旧植民地出身の書き手たちが数多く登場しており、なおかつ小説やエッセイを主とした文芸創作のなかで植民地の記憶を綴り始める時期に重なる。村松武司、森崎和江、小林勝、日野啓三、梶山季之、後藤明生、五木寛之…。朝鮮で生まれ育った人物に限ってみても錚々たる顔ぶれである。このなかで最年長の古山高麗雄は新義州で1920年に生まれ、最年少の五木寛之は福岡県で1932年に生まれ、まもなく朝鮮に渡っている。彼/彼女らは、敗戦時に20歳前後であった、いわゆる植民者二世である。

この一群の書き手たちの特徴は、幼少期から青年期までを過ごした朝鮮に言わんともしがたい郷愁を覚えながら、同時にそれを否認しようとする姿勢を文芸創作のなかに綴っていることである。たとえば、小林勝は「(朝鮮への)私の内なる懐しさを拒否する」(『朝鮮・明治五十二年』1971年)と述べている。こうした相反する感情と姿勢をもつ書き手たちは、朝鮮での記憶をいかに成型し、それをどのようにして語ったのか。本研究では、1960年代から70年代にかけて多産された植民地二世たちの文芸創作を文芸創作群として検証することで、朝鮮での記憶を戦後に表象するという再帰的ないとなみを、日本の戦後文学における新たな文芸的潮流として捉えることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、主に4つの項目から構成した。(1)旧在朝鮮日本人の文芸創作にかかわる資料調査と文芸創作分析。(2)書き手の戦後の活動とその立ち位置に関する検証。(3)書き手の記憶と植民地期の関連資料との比較検証。(4)旧在朝鮮日本人の文芸創作を作品群として歴史化し位置づけること。研究方法としては、上記(1)から(4)にかかわる文芸創作分析と関連資料の調査を継続的に実施し、年度ごとに収集した資料の整理と書誌作成を行った。これに加えて、同時代の文学状況や引揚げ経験をもたない作家との比較を含めて検証した。資料調査は、国内での資料調査とともに、海外での資料調査も韓国を中心に実施し、資料調査やフィールドワーク、関連研究の動向把握に力を注いだ。

4. 研究成果

本研究では、在朝鮮日本人による戦後の文芸創作と関係資料の調査・収集・分析を中心に研究を実施した。1960年代後半から1970年代にかけての旧在朝鮮日本人の資料を、関連する同時代文学の動向を含めて検討している。文芸創作に関しては、森崎和江や村松武司の詩やエッセイを対象にテキスト分析を行い、それらの朝鮮表象や文芸活動を中心に検証した。以下に内容を記す。

森崎和江は、1927年に朝鮮慶尚北道の大邱に生まれ、1938年に父の慶州中学校初代校長就任に伴って慶尚北道慶州邑に転居、1940年に大邱高等女学校に進学している。1943年に父の金泉中学校転任を承けて金泉高等女子校に転入、1944年には福岡女子専門学校に入学するために九州に引揚げている。彼女の本格的な文芸活動は、1949年に久留米の丸山豊を訪ね、詩誌『母音』の同人となって以降である。1958年には谷川雁、上野英信らと文化運動誌『サークル村』を創刊、同誌終刊後も大正炭鉱闘争など炭坑労働者たちと活動し、詩や評論を書きながら、炭鉱労働者、女性史、海外売春婦などに関する著作を発表している。

後述する村松武司や小林勝も同様であるが、森崎和江はみずからを「植民者二世」として自稱し、1960年代末から朝鮮での経験を書き記すようになる。「私は顔がなかった。〔ノ〕がしかし、私の顔なしは、内地的基準にしたがっての話である。〔ノ〕私には、私にさわるのが可能な私の顔がある。それは朝鮮（そして植民地朝鮮）によって作られたものだ。私は自分の顔にさわると、その鋳型となった朝鮮のところに外からふれている思いがする。外からさわりうるだけである」（『朝鮮断章・1 わたしのかお』『アジア女性交流史研究 No.3』1968年）。このように朝鮮での経験を戦後にあらためて書き記すことは、朝鮮のオモニ（母親）たちが彼女自身をいかに形づくってきたのかという彼女のアイデンティティ形成に纏わる作業であり、それを植民者であったという原罪とともに言語化することであった。その直接の契機となるのは1968年であり、亡くなった父に代わって慶州中学校の創立30周年記念式典に招かれて訪韓した経験からである。ただし、一概に彼女の贖罪意識へと結びつけるべきではない。朝鮮での記憶を綴る彼女の再帰的ないとなみが、戦後における女性史のオーラル・ヒストリ構築へと接続されている点が重要である。

森崎和江の訪韓は、より広い文脈でいえば、1964年の海外渡航の自由化が背景にある。これ以降、青野聰や池澤夏樹、立松和平など、のちに作家として活動する人物が海外放浪というかたちでアジア・南洋・ヨーロッパを訪れ、その経験を旅行記や文学作品にする一連の動きが起こっている。沢木耕太郎『深夜特急』（1986-92年）や藤原新也『印度放浪』（1972年）なども知られている。彼らの多くは戦後世代であるが、ここには戦後におけるアジアを舞台とした文学作品の広がりを窺うことができる。在朝鮮日本人でいえば、森崎和江の訪韓とはほぼ同時期、五木寛之が「外地引揚派」を自稱したように、生まれ育った外地を故郷と呼べず、引揚後も日本社会に違和感をもたざるをえなかった一群の人々が、それぞれのかたちで文芸創作を行う流れがこの時期に起こっている。

また、前述の森崎和江が顔を探す自分探しは「母国探し」へとつながる。故郷としての朝鮮の喪失が戦後の炭坑労働者らとの交流を始めとする活動を準備したのだが、彼女の独自の活動を支える方法論として柳田国男の民俗学が援用されている。女性史のオーラル・ヒストリもまた民俗学的方法といえるが、『サークル村』の谷川雁やその弟である谷川健一など柳田国男の思想に関心を寄せる知識人たちが彼女の近くにいたことも強く影響している。彼女の新たな母国探しは、名もなき人々の声の言語化を経て立ち上げられるものであった。この点、同時代には民俗学あるいは文化人類学的なブームが確認できる。たとえば、津島祐子は大学時代に柳田国男やレヴィ・ストロースなどから影響を受けたことを民俗学ブームという語で表現している。

それでは村松武司の場合はどうか。彼は、1924年に京城（ソウル）に生まれている。彼の場合、祖父の代から数えて植民者三世となる。1938年に京城中学校に入学し、43年に卒業。1944年に召集、朝鮮・旧満州・旧ソ連の国境地域に電探兵として従軍する。1945年8月、仁川の電波兵器士官学校にて敗戦を迎え、10月に下関に引き揚げている。そして、1946年に上京し、詩人としての活動を開始する。『純粹詩』『造形文学』を編集。この頃にハンセン病患者たちと文芸活動をした大江満雄や、鶴見俊輔たちとの交流も始まっている。1949年に日本共産党入党、52年に『列島』創刊同人。1957年に詩集『怖ろしいニンフたち』、60年に詩集『詩・朝鮮海峡』を刊行。1964年11月、国立療養所栗生楽泉園の栗生詩話会に選者として参加する。

村松武司は、戦後の初期詩作から朝鮮を描いているのだが、特に注目されるのは、1962年から『朝鮮研究』に連載された『朝鮮植民者 ある明治人の生涯』（1972年）である。同書は、村松武司の聞き書きによる母方の祖父・浦尾文蔵の口述筆記であり、多くの植民者（在朝鮮日本人）がいたにもかかわらず、その記録が近現代史から欠落している点から書き記された祖父の評伝である。「ここでわたしが意図するのは、祖父の歴史とわたしの現在とを区別しないこと。過去を過ぎ去ったものとして葬らず、ふたたび墓場から引き出すことである。したがって、これは日本の過去の植民史なのではない。現在の植民主義的状况を示す」（同書）。

このように村松武司は、植民者という視点から植民地統治下の日本人の生活史を批判的に検証する一方で、大江満雄から強い影響を受け、栗生楽泉園のハンセン病詩人たちとの交流と文芸活動を続けていく。彼は「ライと朝鮮という、二つの中心をもった楕円形が、じつはわたしにとってほぼ円に近づいている」（『遙かなる故郷 ライと朝鮮の文学』1979年）と述べている。これは、ハンセン病をアジア病でもあると捉える知見とともに、「わたしたち晴眼者が文学表現で喪失している実在への探索は、ライ文学において発見できるようだ」という深い洞察が含まれている。なお、村松武司についての研究成果は口頭発表のみであるが、2024年度中に研究論文として発表予定である。

森崎和江や村松武司は、朝鮮半島で生まれ育った旧在朝鮮日本人であることを「植民者」として公言し、戦後日本でその出所来歴を問い直し続けた人物である。しかし、重要なことは、植民者としてのアイデンティティを批判的に問い続けながら、女性史のオーラル・ヒストリやハン

セン病詩人たちとの交流など、新たな人的交流のもとでの文芸創作を行った点である。本研究では、それらの活動がなされた1960年代から70年代にかけての時期に、同時代の文学状況もまた展開している点を含めて検証した。1960年代末の外地引揚者への注目もそうであるが、1970年代には李恢成や金石範による在日コリアン文学の位置づけをめぐる議論から日本語文学という語が浮上する点も考察した。これについては別途、リービ英雄論としてまとめている。この点、津島佑子や池澤夏樹を含めて、植民者二世の世代と戦後生まれの団塊の世代との交差がこの時期に見受けられる。この位相をどう捉えるのかについては今後の研究の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中根隆行	4. 巻 15
2. 論文標題 池澤夏樹と南に向かう想像力：戦後日本と放浪する作家たち	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 跨境：日本語文学研究	6. 最初と最後の頁 41-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中根隆行	4. 巻 56
2. 論文標題 津島佑子の作品群とその世界観	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛文	6. 最初と最後の頁 89-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中根隆行	4. 巻 第68巻第11号
2. 論文標題 翻訳のような創作 リービ英雄と日本語文学の圏域	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『日本文学』（日本文学協会）	6. 最初と最後の頁 35-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中根隆行	4. 巻 第55号
2. 論文標題 森崎和江と柳田國男 植民者二世の戦後	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『愛文』（愛媛大学法文学部国語国文学会）	6. 最初と最後の頁 確認中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中根隆行	4. 巻 99
2. 論文標題 東アジアと日本語文学について考える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本近代文学	6. 最初と最後の頁 140-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 中根隆行
2. 発表標題 植民者の戦後 村松武司の詩作と朝鮮
3. 学会等名 日本比較文学会関西支部2022年度4月例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中根隆行
2. 発表標題 池澤夏樹と南に向かう想像力 現代日本と放浪する作家の南洋群像
3. 学会等名 高麗大(高麗大) (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中根隆行
2. 発表標題 津島佑子の作品群における世界観
3. 学会等名 東アジアと同時代日本語文学フォーラム (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中根隆行
2. 発表標題 朝鮮俳句と韓国俳人 朴魯植と李桃丘子
3. 学会等名 広島近代文学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中根隆行
2. 発表標題 森崎和江と柳田國男 植民者二世の戦後
3. 学会等名 東アジアと同時代日本語文学フォーラム上海大会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中根隆行
2. 発表標題 オモニの記憶と鬼の子の顔 森崎和江の文章から
3. 学会等名 第36回韓国日本近代学会国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------